総合人文科学研究センター研究部門「グローバル化社会における多元文化学の構築」
共催講演会報告

日時：2013 年 7 月 20 日(土)　15:00～17:00
場所：戸山キャンパス 36 号館 382 教室
演題：日本とモンゴルの「相撲」文化について
講師：富川力道（バー・ボルドー）（日本ウェルネススポーツ大学准教授）

本講演会は，公益社団法人日本モンゴル協会の主催，標記研究部門および文化構想学部多元文化論系の共催で行われた。講師の富川力道氏は，内モンゴル出身で，モンゴル相撲の力士としての経験もあり，現在はモンゴルと日本の相撲を対象に人類学的な研究を行っている。

講演の前半は，モンゴル相撲の歴史と現状の紹介が主であり，後半は，日本の大相撲におけるモンゴル力士の活躍の理由を考察する内容であった。

前半ではまず，一口にモンゴル相撲（ブフ）といっても，地域によっていくつかの種類があり，大きく対峙型（両力士が離れた状態で，組み手争いからはじまる）と組合型（特定の形に組み合った状態からはじまる）に分かれること，今日広く行われているのは対峙型で，モンゴル国の「ハルハ・ブフ」と，内モンゴルの「ウジュムチン・ブフ」があることが説明された。また，「鷹の舞い」など，試合前後に力士が見せるさまざまな所作や，「ウジュムチン・ブフ」において有力力士が首にかける「ジャンガー」の意味について，興味深い知見が示され，モンゴルにおいては，強い力士は単なる人間ではなく，土地神が姿を変えて現れたものと信じられていることが述べられた。

後半では，大相撲におけるモンゴル人力士の活躍について，決まり手の統計データ等をもとに精緻な分析がなされた。それによると，日本人力士の相撲は，押しと引きを基調とする「のこぎり相撲」であるのに対し，モンゴル人力士は投げ等の横の動きに長けており，モンゴル人力士が有利に戦える大きな原因は，日本人力士が思いがけない横の動きに対処する訓練を受けていないことにあるという。また，相撲以外のスポーツ経験の有無も関係することが示唆された。

会場には，日本モンゴル協会会員を中心とする一般の方が多かったが，文化構想学部・文学部学生の姿も見られ，講演終了後には，興行としてのモンゴル相撲のシステム等について多くの質問が出され，熱のこもった討論が展開された。（文責：柳澤　明）